airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.04

目標日語教育現場及研究之革新而進行考察談話研究中之語言單位

落合由治
淡江大學日本語文學文系教授

摘要

言語研究的基本問題之一，是該如何設定言語單位。近年談話研究領域常盛行有關談話之基本單位等論述。事實上，在日本國內談話研究早已於 1960 年代開始，所以近年相關研究的再次興起，可謂是回歸該領域的研究原點。

截止目前的談話研究成果，是從各類的視點與方法發展而出，基本上的考察大多沒超出言語表現，或從言語表現觀察出的非言語行動定等範圍。尚未出現將某個具體表現主體施行於社會的談話基本成立要件，當作研究主題而進行的研究成果展現。

鑑此，本論文以具體表現主體施行談話為前提要件，從組成談話之情境、角色、目的等三個要件當作切入點，來彙整、歸納目前談話研究的成果。並依據日劇等談話資料，來考察其具體要件的特徵。如此地藉由設定情境、角色、目的等三個要件的重要性來進行考察，不僅在日本語教育領域上，達到讓日語學習者學習言語表現得目的之外，還能依據所處的情境、角色、目的而衍生體認參與對話之必要性。此乃本論文之重要研究成果的所在。

關鍵字：談話、言語單位、談話前提要件、要件、日劇

airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.04

A consideration of the language unit in discourse research
: For an innovation of spots and studies in Japanese education

Ochiai Yuji
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

It is a subject of one linguistic unit setup of the most fundamental problem of language research. The argument involving the basic unit of a discourse prospers in discourse research in recent years. However, it had such a discussion actively in the 1960s when discourse research started in Japan. Now, these researches return to the starting point again.

Consideration of discourse research is limited to a linguistic expression or the nonverbal behavior observed in discourses. In discourse research, the fundamental formation conditions of discourse which the concrete expression subject is carrying out socially are not a theme of research.

Then, this research induced the element of three discourse formation called a place, a role, and the purpose from the result of former discourse researches. And this research considered the feature of concrete conditions using the discourse data of drama scenario. The necessity that Japanese leaning students take part in a discourse by assuming the element of these three discourse formation according to a place, a role, and the purpose became clear.

Keywords: discourse, linguistic unit, discourse formation, element, drama scenario

airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.04

談話研究における言語単位の考察
――日本語教育の現場と研究の革新のために――

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

要旨

言語研究のもっとも基本的な問題のひとつは、言語単位設定の課題である。談話研究では、近年、談話の基本単位を巡る議論が盛んになっているが、実は日本で談話研究が本格的に始まった 1960 年代にこうした議論は活発に行われており、再び研究が原点に回帰したとも言える。

様々な研究視点と方法が談話研究で発展してきたが、基本的な考察は、言語表現あるいは、そこに観察される非言語行動に限定されており、ある具体的な表現主体が社会的に遂行している談話の基本的成立条件は研究のテーマには上っていない。

そこで、本研究では、具体的表現主体が談話を遂行する前提条件として、場所、役割および目的という三つの談話成立の要素を今までの談話研究の成果から帰納し、ドラマの談話資料によって具体的条件の特徴を考察した。場所、役割および目的という三つの談話成立の要素を想定することで、日本語教育においても、学習者が言語表現をただ発話するのではなく、参与の場所、役割、目的に応じて談話に参与する必要性が明らかになった。

キーワード：談話、言語単位、談話前提条件、要素、ドラマ

airiti

談話研究における言語単位の考察
――日本語教育の現場と研究の革新のために――

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

１．　はじめに

言語研究のもっとも基本的な問題のひとつは、言語単位設定の課題である。日本語学で言語単位について最も本質的な問題提起を最初におこなった時枝誠記(1988/1950)は、以下のように述べている。

> （前略）私がここに云ふ単位といふのは質的統一体としての全体概念である。人を数へる場合に単位として用ゐられる三人、五人の「人」は、長さや重さを計量する場合に用いられる尺や瓦が、量を分割するための基本量を意味するのと異なり、また全体を分析して得られる究極体を意味するのと異なり、全く質的統一体を意味するところの単位である。[1]

時枝の問題提起によって、言語はただ言語形式だけではなく主体の表現活動の問題である「質的統一体」として捉えられるようになり、現在の「文章・談話」という研究領域が次第に形成されるようになった。単位と言う場合、「基本量」か「質的統一体」かという問題は、非常に大きな意味を持っている。現在でも文章と談話を一体として一般化して捉えようとする立場と、それぞれの質的相違に応じて別な表現活動と捉える立場とが存在し、文を越える単位の問題は確定していない。[2]その中で、特に談話に関しては、近年、基本的単位は何かについて議論が再び活発化しており、研究が時枝誠記時代の原点に回帰したようにも見える。水川喜文（2010）は、アメリカで発達した会話分析の理論を談話研究により深く導入することを

[1] 時枝誠記（1988/1950）『日本文法　口語篇』岩波全書 P19
[2] 橋本進吉のラングの思想を基本にしながら時枝誠記の流れを受けた市川孝（1978）、永野賢（1986）の文章論と、国立国語研究所で方言や話し言葉を取り上げていた南不二男（1972）の研究を引き継ぐ形で展開されている、寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一（1990）、佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一（1997）は、文章・談話の単位には共通点があるとして、文章と談話を一体として一般化する方向で研究を進め、それが現在の日本語学での基本的パラダイムになっている。一方、文章と談話は質的に異なる表現活動として捉える見方は、表現学会（1986-1992）および表現学会（2013）に集約されたように表現研究の流れとして位置づけられる。

airiti

提起し、「ターン構成要素（TCU)」を談話の基本的単位として考察する必要を訴えた。[3]一方、石黒圭他（2014）は、講義の談話を分析して、「談話型」、「話段」、「日本語機能文型」、「情報伝達単位（CU)」を基本単位として提案している。[4]

こうした談話の基本的単位の問題は、当然のことながら、日本語教育に大きな影響を与える。本論文では、今までの談話研究でよく行われてきた方法を概観しながら、日本語教育の会話教育のために、どのように談話の基本的単位を捉えればよいかという点から、談話の基本的単位設定の方法について考察していきたい。

２．談話研究の基本的課題と方法

談話研究は 20 世紀半ばから発達し、現在まで発展してきた分野であるが、研究の資料という点から見ると今までは限定された個人や対話者の独話、雑談、接触場面、討論あるいは依頼や断りなどの社会的目的を伴った言語行動を中心に研究を進めてきた。[5]こうした成果は授業での分析にも応用されている。[6]

2.1 談話構造に注目する分析

会話分析あるいは談話分析は一般的には、ある資料として録音・録画された一連の流れの会話を場面により分け、さらに話者によって区切って、その連続の仕方およびそこで使われる表現要素の機能や特徴を、スクリプトに変換して考察する。以下は、吉野文・西住奏子（2015）による二言語併用ゼミでの日本人学生（JAM、JAF）と

---

[3] 水川喜文（2010)「会話分析による談話単位の革新とその課題」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』47、pp.53-65 参照。

[4] 石黒圭・佐久間まゆみ・渡辺文生[他]・宮田公治・宮澤太聡（2014)「講義の談話の単位と展開(日本語学会 2013 年度秋季大会ワークショップ発表要旨)」『日本語の研究』10-2、pp.95-97 参照。

[5] 一例として談話研究の研究資料の概観については、高崎みどり・立川和美編（2008)『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房を参照。談話研究の研究史については、高崎みどり・立川和美編（2010)『ガイドブック文章・談話』を参照。

[6] 日本語教育への応用については蔭山峰子・藤井みゆき（2009)「ビジターセッションにおける接触場面の談話・会話分析」『同志社大学日本語・日本文化研究』7、pp.43-59、田中惇(2014)「学習者の発話を促す試み-会話支援ストラテジーを活用して-」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』5、pp.151-172 等参照。

airiti

留学生（GEM、KYF）による授業開始直後の会話の様子のスクリプトである。

例１日本人学生と留学生による授業開始直後の会話

→1　KYF　あん(.)日本語でいいですか?
　2　GEM　[え:
　3　JAM　[うん
　4　JAF　はい
　5　KYF　大丈夫ですかね?((笑いながら))
→6　JAM　And English.両方使わないと.[both both language and so
　7　KYF　　[Okay Okay
　8　JAM　(3)(###)
　9　KYF　(3)学校制度は(.)こ(.)これ:です(.)これ:ですか?

（注）スクリプトの記号の用法
[ことばがかさなっていることを示す。
() 聞き取りが確定できない場合、当該文字列を丸括弧でくくる。
何かことばが発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。
（数字） その数字の秒数だけ沈黙のあること。0.2 秒に満たないごく短い間合いは(.)で示す。
:: 直前の音が延ばされていることを示す。
. 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
? 語尾の音があがっていることを示す。
↑↓ 音調が極端に上がっていること、下がっていることを示す。
, 音が少し下がって弾みがついていることを示す。
下線 強められて発話されていることを示す。
h 笑いを示す。
° ° 音が小さいことを示す。
(( )) 転記者による注記であることを示す。[7]

会話分析には、音声や音声の跡切れなどを記録するスクリプトが決まっていて、一定の規則で文字化する。スクリプトをみると、興味深い点がいくつかある。まずは、1の（.）や8,9の（3）（.）など、会話の間に途切れる部分がよく見られることである。また、2と3は重複して1に対する返答が行われている。6,7では日本語ばかりではなく英語も混ぜて発話されている。

吉野文・西住奏子（2015）は、以下のようにこの場面を捉えている。

> まず KYF がやや戸惑いながら話し合いを日本語で進めてよいかと他の参加者に許可を求めると、他の3 人はすぐにそれを受入れる。しかし、KYF がさらに「大丈夫ですかね」と念押しをすると、JAM が英語と日本

[7] 吉野文・西住奏子（2015）「「二言語併用ゼミ」の場面における参加者の言語使用-座談の分析に関する一試論-」『国際教育』8、pp.35-50 から論者整理。

airiti

語の二言語を使うのがこの場のルールだという彼の認識を表明する。

KYF の発話からは、KYF 自身は日本語で話したいという意思があること、しかし「二言語併用ゼミ」の参加者として、JAM のいう規範も受入れようとしていることが読み取れる。他の二人の参加者、GEM とJAF は、JAM の二言語使用の規範意識に対して明示的な賛成の意思表示をしていないが、KYF と同様にJAM の提案を了解しているように見てとれる。（引用文中の下線は論者、以下同様）[8]

会話分析では、以上のように各話者の言語行動の意図を言語表現と付随する行動、および話者の交替関係から理解する。

会話分析と談話分析における基本的な会話構造の捉え方は、ターンの交替である。串田秀也（2005）[9]によれば、

会話のもっとも基本的な特徴は、共時的に参加の機会が分化している（たとえば話し手と聞き手という形で）とともに、分化した参加機会が通時的に繰り返し再配分される（たとえば話し手の交替という形で）ことである。これに対し、たとえば合唱という活動への参加や、重いものを協力して運ぶという活動への参加は共時的には分化していても通時的に再配分されることはあまりない。また、たとえば行列という集まりへの参加は、参加機会が共時的に分化している（先頭、２番目…という形で）が、通時的な分化はその帰結としてもたらされるだけである。さらに、将棋のようなゲームへの参加機会は、通時的な配分が予め固定しており再配分されない。相互行為は、その参加機会がどのように分化しているかに応じて、さまざまな類型に区別することができる。

それゆえ、共時的に分化した参加機会が通時的に繰り返し再配分されるメカニズムの研究は、会話的相互行為における参加の組織化を考えるための土台を形成する。これが「ターンテイキング組織(turn-taking organization)」の研究である。

吉野文・西住奏子（2015）の授業開始時の会話例は、使用言語の許可を求める行為を巡って、役割に応じターンの交替が生じていることを意味している。広い意味では、許可承認要求の行為による会話と言える。会話分析は、主にエスノメソドロジーなど社会的目的を持った行動として人間の言語行動を理解しようとする社会学的関心から行われてきたが[10]、現在では多方面に応用されている。

---

[8] 吉野文・西住奏子（2015）同上論文から論者整理。

[9]串田秀也(2005) 「会話における参加の組織化の研究：日本語会話における「話し手」と「共ー成員性」の産出手続き」(京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文、2005 年 11 月)

[10] Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics

airiti

しかし、ここで一つ、日本語教育の観点から見ると大きな問題がある。それは、分析の点線部分のように、分析は常に第三者の外からの視点で「解釈」され、1の（.）や8,9の（3）（.）など、会話の間に途切れる部分がよく見られることなど、何かを図り戸惑いながら進んでいると見える会話の参与者にとっての心理的意味は、間接的にしか問題にされていないということである。第三者は、記録された一全体を質的に捉えて、その場面での参与者の役割によるターン交代という構造を見出し、それに伴う参与者の行動や表現に意味を跡付け的に解釈できるが、会話の参与者は同時進行する状況の中でこの会話を進めており、スクリプトに出ている様々な特徴のうちのある部分は理解しながらも、ある部分は理解できなかったり、また誤解したりしていく可能性を常に持って、会話していることになる。従って、日本語学習者の場合は、跡付け的に解釈できる観察する第三者ではなく同時進行の参与者のいずれかとして自分の位置をこの会話で定位しない限り、いくらこうしたスクリプトから作られた会話モデルが提示されても、その内部に参与者として入ることはそのままではできない。つまり、会話表現を身につける場合、誰の立場でその会話に参与するかで、その表現や行動の意味や、自分がその場の状況に応じて推測し、考えまた、相手の行動や言語を理解して応答しなくてはならない内容はまったく変わってしまうということである。会話表現と理解には、実は会話参与者の場面（ここでは教室での討論）、立場（授業の参加者）、目的（使用言語決定）に応じた役割性という問題が潜在し、それは場合によっては失敗するという可能性も当然持っているのである。談話の場合には、言語表現や付随する行動の意味を理解しただけでは不十分で、参与者の立場とその成功の可能性という条件を切り離すことはできない。この

---

for the organization of turn-takingfor conversation. Language 50: 696-735. H. サックス／E. A. シェグロフ ／G. ジェファソン／西阪 仰訳／S. サフト翻訳協力（2010)『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織（世界思想ゼミナール)』世界思想社は、話者交替の規則を現在の話し手が次の話し手を選択する場合、現在の話し手以外の会話者が自主的に話し手になる場合、他の会話話者が誰も発話しないので、現在の話し手が話を続ける場合の三つに分けて考察した。

airiti

ことは、談話の前提条件的基本単位として、場面、立場、目的の成否を加える必要があることを意味している。

2.2談話ストラテジーに注目する分析

こうしたターンの交替をもたらす言語行動は、言語運用のストラテジーとして理解することができる。談話分析でよく行なわれてきた、依頼と断りの会話分析などもターンの交替にともなう言語表現の機能をストラテジーと捉えて分析したものである。[11]談話分析は、各言語行動や非言語行動を言語運用のストラテジーの連続として捉えて、各表現の機能を考察している。インターアクションのテーマもよく取り上げられる。

柳田直美(2002)は、母語話者と非母語話者の接触場面を分析して、非母語話者と母語話者の 相互作用として以下の7項目を会話支援ストラテジーとして提起した。

あいづち：話を聞いていること、理解していることを伝えたり、発話に対する肯定的な評価を示す。

確認チェック：NNS の発話を NS が正しく理解しているかどうかを NS 自身が NNS に確認する。

明確化要求：NS が NNS の発話を理解できない時などに NNS に発話を明確にするよう要求する。

情報要求：トピックに関する新情報を NS が引き出そうとする。

訂正：NNS の不適切な言い回しを訂正する。

貢献・完成：NNS が適当な語彙や表現を探せない時に先取りして完成させる。

自己発話の修正：NS が自分の発話を NNS の理解を促進するために、NNS の要求によって 、または自発的に言い換えたり、説明したりする。[12]

その結果として、

NS 側の NNS との接触経験の量的・質的差が会話支援ストラテジーの

---

[11] 言語運用のストラテジーは談話研究の大きなテーマで、ポリー・ザトラウスキー(1993)以来、多くの研究がなされてきた。中国語母語話者の日本語ストラテジーについては、一例として、施信余(2005)「依頼に対する「断り」の言語行動について ： 日本人と台湾人の大学生の比較」『早稲田大学日本語教育研究』6、pp.45-61、平静・松村瑞子(2011)「日本語学習に関わる研究では、日中会話におけるポライトネス・ストラテジー」『Studies in Languages and Cultures』26, 73-84, 2011-02-07 等参照。

[12] 柳田直美(2002)「日本語母語話者の会話支援ストラテジー ： 非母語話者との接触経験が及ぼす影響」『日本語教育方法研究会誌』9-1、pp.28-29 参照。

airiti

使、用に次のような影響を与えていることが認められた。まず、接触経験が多いN・Sグループの方がJグループに比べ、確認チェック・明確化要求を多用して正確な情報のやりとりに重点を置いている。Jグループは正確な情報のやりとりではなく、単なる言葉のやりとりにとどまってしまっている。次に、言語教師であるNグループの方が、言語教師ではないSグループに比べて会話支援積極的かつ効果的に行っている。これには、ふだんNNSと言語習得を目的として接して いるか、言語を情報伝達手段として接しているかの違いが影響しており本研究ではNグループが最も効果的な会話支援を行っていたといえる。[13]

場面と立場の明確な会話分析によって、話し手が会話に参加するときの行為的なタイプの違いを理解することができ、どのような言語行動がより適切なのかを理解できる。このことも、先の2.1同様に談話の前提条件的基本単位として、場面（ここでは、接触場面）、立場（母語話者）、目的（学習者支援）の視点を加えて初めて談話行動の十全な理解や遂行が可能になることを意味している。

こうした場面、立場、目的を基本単位に取り入れると談話分析は、授業分析にも応用しやすくなる。田中惇（2014）は、教育実習中の会話記録を元にして、そこで見られた言語行動と付随行動を会話支援ストラテジーと見なして整理している。

表１　適切な質問に移行できた例

	発話内容	談話行動	質問の種類	ストラテジー
T	皆さんは九份に行ったことがありますか？	I	CQ	
S	あります	R		
T	どんな街ですか？	F	OQ	情報要求
S	古い街です	R		
T	じゃあ、何が有名ですか？	F	PQ	情報要求
S	りーゆえ	R		
T	りーゆえ？	F		明確化要求
S	芋で作った麺みたいなスイーツ	R		
T	へえー、おいしいですか。	F	CQ	あいずち　情報要求

[13] 柳田直美(2002)同上論文。

airiti

S	おいしいです	R		
T	他には何が有名ですか？	I/F	LQ	情報要求
S	お茶	R		
T	お茶？	F		確認チェック
S	ウーロン茶	R		
T	ウーロン茶？	F		確認チェック
S	タンビンチャ	R		
T	タンビンチャ？	F		明確化要求
S	お茶の名前、お茶の種類	R		
T	へぇータンビンチャ？みなさん知ってますか	F	CQ	あいずち 確認チェック
S	はい	R		
T	おいしいですか？	F	CQ	情報要求
S	（くびを横にふる）	R		
T	おいしくない？	F		明確化要求
S	渋いから	R		
T	じゃあ、お茶は好きですか？	I/F	CQ	情報要求
S	あまり	R		

（注）I:先制、R:応答、F:後続／CQ: Closed-Response Question、LQ: Limited-Response Question、OQ：Open-Response Question、PQ: Probing Questions[14]

田中惇（2014）は統制された初級日本語教室での会話として「先制（Initiation)」、「応答（Response)」、「後続発話（Follow-up)」という流れが続いて会話支援がうまくいった例として紹介している。しかし、授業での会話であっても実は雑談の性格を持っており、教師はたくさんの答えを引き出すべきと考えるが、「へえー、おいしいですか？（あいづち)」のような相手への共感的インターアクションなどがより自然な会話のためには重要とも言え、会話支援ストラテジーという視点だけでこうした会話を理解できるとは言えない点もある。雑談では、その人物と話題に参与者が関心を示して参与することが前提になっているからである。また、教師の確認要求に対し

[14] 田中惇(2014)「学習者の発話を促す試み-会話支援ストラテジーを活用して-」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』5、pp.151-172 から論者整理。

airiti

て、この場合は雑談の相手としての学習者が相手の要求を理解して的確に答えるという雑談の目的とストラテジーを適切に理解して対応しているため、会話の流れが順調に続いたと言える。雑談にほぐれた雰囲気や楽しい気分が欠かせないように、上級者になればなるほど、自然会話の状態に近づいて、さまざまな付随行動がうまく機能しないと会話は続かないと言えよう。同時に、雑談という場面での参与者が互いに相手の発話に関心を持ち、それを言語行動で表現して、「確認要求」とそれに対する回答というような相互の役割を果たすことも前提として求められる。談話ストラテジー遂行の前提として、先の談話構造の分析と同じように、場面（ここでは、教室での雑談形式の対話練習）、立場（日本語を雑談で練習）、目的（台湾の様子を先生に説明）という前提条件的基本単位が必要であることが分かる。

2.3マルチモーダル分析

これに対して、より非言語行動と言語行動の相互交渉に注目して会話分析をおこなう、マルチモーダル分析も実施されるようになっている。教室だけでの会話ならば、従来の言語行動を中心にした会話分析でもかなりの特徴は見出せるが、日常生活や応用的教育により分析成果を活かす視点で見れば、マルチモーダル分析さらにはクロスモーダル分析が必要になるであろう。

細馬宏通(2011)は、実演された四つの漫才、コントについて、それぞれ客の有無によって、身体ノリツッコミの頻度を調べた。

例2「振り返ります」

コント「ハンバーガー屋」。T ：店員役、 D ：客の役

01T それでは厨房の方を振り返ります

→02 (1. 1) ((1 ： 左足をゆっくり前に出し、Tから体をそらすように回転させ観客の方を向く))

03D 注文を繰り返せよ ((1： 急にT の方を向く))

事例2 「振り返ります」では、店員役T が発話01でボケるが、音声上は続けて02 で1, 1 秒の長い沈黙が起こり、発話03でようやく客の役DがTにツッコミを入れる。しかし、身体動作に注目すると、2行目はただの沈黙ではない。Tの発話01を聞いた直後、Dはゆっくりと T から

airiti

体をそらし始め、発話03で急に再びTの方を向く、このとき、02で生じた身体動作が身体ノリで、発話03 のツソコミ発話と合わせたものが身体ノリツッコミである。[15]

その結果について、以下のように分析している。

その結果、お笑いのタイプ（コント／漫才）間では有意な差が見られなかったが、観客ありと観客なしとの間で有意な差が見られた（x2-test，p＜0．05)。観客のない条件でも観察されたことから、身体ノリツッコミは、観客の行為に対する自動的な反応ではなく、お笑い芸の中にあらかじめ組み込まれたものであることがわかる。その一方で、観客の有無で有意差があったことから、身体ノリツッコミはセリフのように必ず出現する表現ではなく、観客の有無に影響を受けることがわかった。[16]

表２　各ネタにおけるツッコミのうち身体ノリツッコミの出現頻度

ツッコミの総数		身体ノリツッコミ数	
		客あり	客なし
A（コント）	22	6	5
A’（漫才）	22	9	5
B（コント）	17	10	8
C（漫才）	28	12	3
計	89	37	22

（注）細馬宏通(2011)表1による

このように、身体的表現と言語表現とは密接不可分な関係にあり、漫才・コントのような話術による芸を専門に行っている職業人は、こうした行動を意識してパフォーマンスで実行し、さらに観客を意識して程度を調整していることが分かる。「話芸」とは言われるが、身体的表現なしには「話芸」は成り立たないのである。場面（舞台の性質、お客の有無等）と役割（ツッコミ、ボケ等)、目的（笑い、注目、アピール等）に応じて、こうした「話芸」もマルチモーダル表現が変化すると言える。

そして、専門家でなくとも言語表現にともなって一定の行動が日常的に見られる場合は少なくない。荒川歩(2011)は、今までの研究史をまとめる形で、マルチモーダル分析の重要さについて以下のよ

[15] 細馬宏通(2011)「漫才、コントにおけるツッコミ役のパフォーマティヴな気づき(「コミュニケーションと気づき」及び一般)」『電子情報通信学会技術研究報告．HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎』111-190、pp.83-86 から論者整理。
[16] 細馬宏通(2011)同上論文。

airiti

うに述べている。

従来のコミュニケーション研究では，言語，パラ言語，身振り，個人空間，接触，匂いなど，コミュニケーションのチャネルを個別に扱い，それぞれの総和として，コミュニケーションを考えるというアプローチが便宜的にとられることが多かった。その中で，身振りなど非言語コミュニケーションの研究では，個々の動作を記号ととらえ，それぞれが，どのような意味を持つか，どのような心的状態を表しているかを解明することに主眼が置かれていた（e. g., Morris, 1977）. しかし，観察技法や理論の発展に伴い，例えば非言語コミュニケーションの1 種とされる身振りは，言語の発声と同じ「成長点」から分かれたものであるというMcNeill（1987, 1992）の考えが提唱され，人の行動を理解するには，他のチャネルと言語を切り離すことなく，コミュニケーションを全身体・全環境的にとらえることの重要性が指摘されるようになってきた（Goodwin, 2000；細馬・片岡・村井・岡田, 2011）. [17]

そして、大学生の被験者の雑談に伴う非言語行動を観察して、「指さし」行動について以下のようなパターンを見出している。

表３　相手への指差しと同時に現れる発話のパターン

ラベル	定義	同時に発話される言語内容例
呼びかけ	会話開始時、または話者が交代し、次の話者が話し始める時に出現したもの	「昨日さあ」 「この前の日曜な…」 「でもさあ」
同意	相手の発言に同意する際に、多くの場合に同意の言葉を伴ったもの	「たぶん、そうそうそう」 「うんうんうん」 「なんかそんなん」
話題の中の対象への言及	すでに話題に上がっている事物への言及を伴ったもの	「あいつあかんわ」 （話題の映画が）「あれ、おもんないらしいで」 （話題の人物が）「声高いやろ？けっこう…」
相手の知っている事物への	話題には上がっていないが、相手が知っている内容への言及を伴ったもの	「あとな、水戸黄門が代わったやん」 「USJいったときあったやんか」

[17]荒川歩（2011）「指さし行動と発話による談話の達成(<特集>相互作用のマルチモーダル分析)」『社会言語科学』14-1、pp.169-176。引用文中の文献は、Morris, Desmond(1977) *Manwatching：A fiegd guide to humanbehabior*, NewYork：H.N.Abrams、McNeill, David（1987）*Psycholinguistics ：A new approach*. NewYork：Harper & Row、McNeill, David（1992）*Hand and mind* . Chicago：University of Chicago Press、Goodwin, Charles（2000 ）Action and embodiment within situated humaninteract. *Journal of Pragmatics*32, pp.1489-1522、および細馬宏通・片岡邦好・村井潤一郎・岡田みさを(2011)「特集「相互作用のマルチモーダル分析」『社会言語科学』14-1、pp.1-4。

airiti

言及		「めっちゃさむかったな、二宮なあ、あれ…」

（注）荒川歩（2011）から論者整理

日常的雑談でも、こうした各種の非言語行動が言語行動に伴っているが、同じ「指指し」でも場面、役割、目的によって意味が異なっていることを示している。非言語行動と言語行動の相互交渉に注目して会話を捉える場合も、場面、役割、目的を基本的単位として設定しておく必要があることが分かる。

2.4クロスモーダル（多感覚コミュニケーション）分析

こうした言語行動とそれに伴う非言語行動の関係は、より複雑な構造をもっているのではないかという観点から、現在ではクロスモーダル（多感覚コミュニケーション）の概念が提起されるようになっている。現在は、工業デザインや情報処理などでの言及が主であるが、今後、ますます注目される対象になるであろう。たとえば、味覚、嗅覚、触覚などを音や色の共起で連想させるなどの実験が行われている。日常的コミュニケーションや教育の点では、表情、音声と情動との関係が重要と言えよう。

田中章浩(2012)は、以下のようにクロスモーダル（多感覚コミュニケーション）の重要さを指摘している。

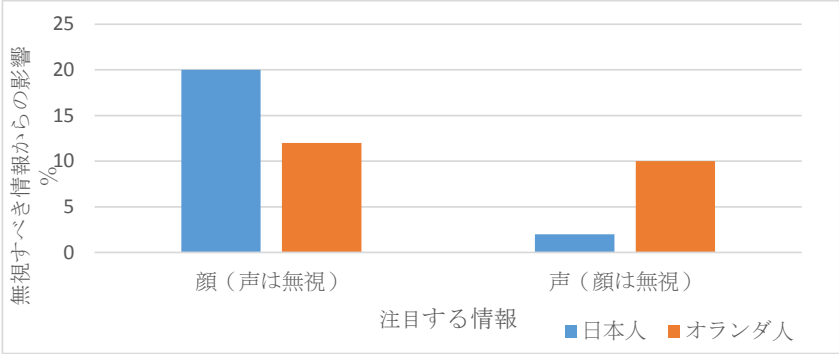
> 他者の情動や気持ちを理解することは，円滑な社会的関係を維持する上で不可欠といえる．対人コミュニケーション場面においては，個人と個人の間でさまざまなチャンネルを通じてメッセージが伝えられている．伝達されるメッセージは言語情報と非言語情報に大別することができる．非言語情報は，顔の表情，視線，音声のパラ言語情報（声の高さ・大きさ・速さ・間合いなど），ジェスチャー（しぐさや姿勢など）に始まり，外見的特徴（身体の大きさ，体型，肌の色，服装，化粧など），身体接触，対人距離などに至るまで多種多様であり，送り手の情動，意図，態度などを伝えている．これらの情報が送り手によって同時並列的に複数のチャンネルを通じて伝えられ，受け手によって統合的に解読されることで，言語情報のみならず，情動などの非言語情報をも含めたコミュニケーションが実現されている．
>
> （中略）非言語情報は，その種類にもよるが，言語情報と比べて意図的な抑制や偽装が困難と感じることも多い．そこで，多くの場面で聞き手は，さまざまな非言語情報に強く依存して，相手の「真意」を判断しよ

airiti

うと試みる.[18]

そこで、「そうなんですか」という発話についての映像で顔と声の情動が一致（喜び顔＋喜び声，怒り顔＋怒り声）している場合と不一致（喜び顔＋怒り声，怒り顔＋喜び声）の場合で相手の意図を理解できるかどうかを日本人とオランダ人で実験したところ、日本人は顔の情動判断時には声からの影響が大きくなって、逆に声の情動判断時には顔からの影響は小さかった。つまり、一貫してオランダ人よりも声への依存性が高かった。そして、日本人もオランダ人も、コミュニケーション場面での情動の知覚において、顔と声という多感覚情報の重みづけの文化による影響を大きく受けており、その解釈の相違でギャップが生じている可能性があると、田中章浩(2012)は述べている。[19]

図１　田中等（2010a）の実験結果



（論者注）田中章浩(2012)から論者整理。グラフの意味は、声を無視して顔だけを見た場合、日本人は真意を誤解する率が高くなり、顔の表情は無視して声だけを聞いた場合は、真意をほぼ了解した。オランダ人の場合は、二つの場合で、誤解する率が一定しており、日本人とは注目している情報が異なっている。

このように、表情、声のトーンなどクロスモーダルな情報は、コミュニケーションでの相手の真意理解の成功、不成功に大きく関係していると考えられ、クロスモーダルな表現要素を考察する場合も場面、役割、目的を基本的単位として設定しておく必要があること

[18] 田中章浩(2012)「顔と声による情動の多感覚コミュニケーション」『認知科学』Vol.18No.3、pp.416-427
[19] 田中章浩(2012)同上論文。

airiti

が分かる。

以上、談話に関わる様々な研究をみてきたが、いずれも参与者が会話する場合、雑談を例にすれば具体的場面（友人間、仕事場、ビジネス等）とそこでの役割（友人、同僚、仕事相手等）、コミュニケーションの目的（親睦、時間つぶし、情報交換、気分の緩和等）を想定せずに、会話を進めることはできず、これらの条件が具体的に参与者に理解され、共有されていればいるほど、会話は順調にいくことになる。日本語学習者の場合も、より運用場面が実生活に近づくほど、こうした条件を意識し、理解して参与することが必要になる。談話を研究する場合、そして、日本語教育で応用する場合、場面、役割および目的は談話の成立条件として、談話の基本的単位とする必要があると言える。

３．談話の基本単位としての場面と役割

場面、役割、目的を談話の基本的単位とした場合、いったいどのような場面、役割、目的が具体的言語表現の背後に潜在しているのか、これは今後の談話研究において意識的に分析、理解していく必要がある。談話研究では、自然談話により事実として社会で運用されている談話現象を捉えることを第一義としているが、研究資料として、今までも取り上げられてきた依頼、勧誘、断わり、雑談、接触場面、教室会話等を除けば、ほとんどの社会的場面は個々人のプライバシーや利害に密接に関わり、第三者が簡単に採取したり公開することはできず、また第三者が関与することで談話行動自体も影響を受けざるをえない可能性があると言える。[20]そこで、本論文では、ドラマ・シナリオのシーンを例に場面、役割および目的を基本単位

[20] 談話の調査法については、中井精一編（2005）『社会言語学の調査と研究の技法―フィールドワークとデータ整理の基本』おうふう、伝康晴・田中ゆかり編（2006）『講座社会言語科学６方法』ひつじ書房参照。自然談話資料蒐集の困難については、武田加奈子（2007）「発話行為談話の調査・分析方法―勧誘談話を例に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』第 174 集「接触場面と言語管理の学際的研究 接触場面の言語管理研究 vol.5」村岡英裕編参照。

airiti

として談話表現を理解する分析例を提示したい。[21]

3.1ドラマ・シナリオから分かる談話の基本的単位―ビジネス場面

ドラマの場面には、具体的と抽象的、現実的と架空的、現代的と歴史的、日常的と非日常的など様々なカテゴリーが存在し得る。ここでは日本でのシナリオ賞受賞作品からまず、具体的で現実的、現代的な日常的場面として、ビジネス場面の例を取り上げて、考察していきたい。

例３『大麦畑でつかまえて』冒頭

１大麦畑

彼方に十勝連峰を望む広大な畑。大きく育った大麦の穂が風に吹かれ、音を立てて揺れている。

Ｔメインタイトル『大麦畑でつかまえて』

その向こうの通りをワゴン車が数台、走っていくのが見える。

２矢木沢家・表

広い敷地内に二階建ての母家。

その横には農器具を収める納屋があり、トラクターなどが止めてある。

ワゴン車が走ってくる。家の前に停まると、男たちが慌ただしく降りてくる。

ＣＭの撮影スタッフである。

男たちはさっそくカメラやＶＴＲの機材を車から降ろし、撮影の準備を始める。

家から出てくるこの家の主人、矢木沢徹郎と妻の文子。ディレクターの手塚と挨拶を交わす。

手塚「おはようございます。お世話になります」

徹郎「ご苦労様です」

文子「遠かったでしょう。今、お茶入れますから」

手塚「あ、けっこうです。すぐ撮影に入りますから」

続いて黒塗りの乗用車が停まり、ビール会社の重役が取り巻きを引き連れて降りてくる。

手塚「（徹郎に紹介）××ビールの常務さんです」

常務「（近づいて名刺を差し出す）このたびはご協力ありがとうございます」

---

[21] 自然談話では採集不可能な恋愛の場面を取り上げた泉子・K・メイナード（2001）『恋するふたりの「感情ことば」―ドラマ表現の分析と日本語論』くろしお出版等、社会的に第三者が関与できない場面には、ドラマや漫画等の資料は有効といえる。ジェンダー研究では、ドラマ資料は常用されている。一例として、黄馨儀（2008）「テレビにおける女性イメージの一考察―NHK 朝の連続テレビ小説から見た日本の女性像」『メディア学』23、pp.104-154 参照。

airiti

徹郎「あ、いや、とんでもないです」
恐縮して頭を下げる徹郎と文子。
また車が停まり。今度は観光課の課長、桜井が助役を連れて降りてくる。
桜井「おはようございます。（手塚に紹介）助役です」
手塚「あ、これはどうも」
それぞれ挨拶を交わし、名刺交換する。[22]
（注）枠囲い：時空条件、下線：その場の関与者と状況、波線：参与者の社会的属性・役割、太線：会話場面

台詞以外のト書きの部分は、シナリオ作家によって細かい説明がある場合もない場合もあるが、人間が会話をする場面の基本条件がまずそこに示されている。ここでは三つの要素を取り出すことができる。第一は、枠囲いの部分の「十勝連峰」「広大な畑」のような空間に関わる要素、「大きく育った大麦の穂」「風に吹かれる」のような季節、天候など時間に関わる要素、「二階建ての母家」「農器具を収める納屋」「トラクター」など会話の場の要素で、時空要素と呼ぶことにする。麦の収穫期は日本では「麦秋」と呼ばれ、九州では５月から関東では６月から北海道では８月で、結局ドラマは８月の北海道十勝平野の田園地帯の農家が舞台で、北海道の夏の天候である。時空要素は、社会的人間活動と深く関係しており、談話での話題の選択等で大きな影響を参与者に与える。日本語学習者の場合、こうした日本の時空に関する知識が当然必要になる。第二は、下線部分の関与者と状況、波線部分の会話の参与者の社会的属性・立場など、会話に影響し、会話を直接、構成する関係者と参与者の条件である。主体要素と呼ぶ。この場面では、ＣＭ撮影の仕事に来たスタッフのいる前で直接の参与者が会話をする。徹郎・文子は遠路来たＣＭ制作者一行の訪問を受け、撮影を受ける立場であるのに対し、手塚はプロジェクトのまとめ役のプロデューサーの立場で、目的を達成する必要があることになる。関係者、参与者に関わる主体要素は、ポライトネスや言語非言語表現の選択に深く関係すると同時に、ストラテジーや話題の選択等、談話内容を規定する。日本語学習者の場

[22] 前川洋一「大麦畑でつかまえて」日本脚本家連盟（2007）『テレビドラマ代表作選集二〇〇七年版』日本脚本家連盟 p. 9

airiti

合、こうした日本の社会的立場、職業、業務に関する知識が当然必要になる。この例はビジネス場面でもあるため、挨拶や紹介に関する非言語動作やマナーに関する知識が必要になる。第三は太線部のように、ＣＭ制作の参与者として「挨拶」を交わし「名刺交換」する場面であるが、ＣＭ制作を受ける徹郎・文子、プロジェクトをまとめる手塚、宣伝を依頼する常務と観光課の桜井には、それぞれの立場と目的があり、それに応じて、これからＣＭ制作を実施するために「挨拶」には、目的を達成するための非言語行動（頭を下げる、笑顔を見せる、柔らかな口調等）をともなう必要があることになる。これを目的要素と呼ぶ。日本語学習者の場合も、ビジネス目的のある挨拶として、それぞれの立場と役割を理解して、言語と非言語行動を実施しなくてはならない。

以上のように、場面（時空要素）、立場（主体要素）および目的（目的要素）という、こうした三つの談話成立の基本条件を談話の基本的単位として考えてはじめて、手塚は「おはようございます。お世話になります」をどのような態度、どのような声の調子、速さで、どのような表情や動作で言うかを決めることができる。もし、こうした条件の理解が不十分であったり、表現法選択が不適切であれば、この場の「挨拶」はうまく進まないことになり、プロジェクトのまとめ役の目的も果たせないことになる。ただ、「おはようございます。お世話になります」という言語表現があるのではなく、それが具体的な社会的場面でのマルチモーダル表現として機能するためには、以上見てきた三つの談話成立の基本条件を談話の基本的単として理解した上で、どう表現するかを決める必要があるということである。

日本語教育でも、初級・中級はまず言語表現に集中するとしても、上級以降の談話能力の成長のためには、少しずつ場面、立場、目的という三要素について教員が考えながら教材を分析したり作成しながら、教室での練習で参与者のそれぞれの条件を決めて、学習者に自覚させながら、いわば「演技」の形で練習し、談話技能として身につけていく必要があると言えよう。

airiti

3.2ドラマ・シナリオから分かる談話の基本的単位―制度的場面

次に、ドラマのシナリオには個人的と公的、自由的と制度的、開放的と制約的など談話の自由度に関わるさまざまな社会的条件を描く場面がある。ここでは、公的、制度的、制約的な典型的場面として、裁判の開始場面を取り上げてみる。

例４『マチベン　ファイルNo.1』「法廷は涙にめざめる」冒頭

１東京地裁・大法廷
窓のある大法廷。
誰もいない証言台にさしこむ陽光。
「起立」の声が響く。
入廷する裁判長の友永二三夫（57歳）と、左右の陪席判事。
一斉に立ち上がる廷内の人々。
弁護人席には、神原啓吾（29歳）と、後藤田薫（52歳）。
検察官席には、松尾一成（38歳）と、白石紀夫（50歳）。
満杯の傍聴席の前列には、報道関係者が陣取り、その脇には、浦島たまお（34歳）と村山信介（45歳）が座っている。さらに後方には、太田政孝（56歳）、河瀬みゆき（42歳・スナック経営）、鈴木博史（35歳・教師）らの顔がある。
友永「これより審理を始めます。被告人は前へ」
被告人が立ち上がる。
女――真っ白いシャツ姿、臆することなく、かといって、力む様子もなく、落ち着いた足取りで証言台に立つ。天地涼子（38歳）である。
友永「被告人の名前は？」
女「天地涼子です」
友永「年齢は？」
涼子「38歳です」
友永「住所は？」
涼子「東京都品川区××３の21、氷川ハウスです」
友永「……職業は？」
水を打ったように静まりかえる廷内。
神阪と後藤田が見つめる。
涼子「弁護士です」[23]

ドラマが公的場面をどれだけ忠実に事実として再現しているかは評価が分かれるが、専門的手続きや法律・法廷用語、法廷での様々

[23] 井上由美子「マチベン　ファイル No.1／No.4」日本脚本家連盟（2007）『テレビドラマ代表作選集二〇〇七年版』日本脚本家連盟 p.115

airiti

なやり取りなどの設定は、実際はリアリティがないドラマが多いと言われる。[24]しかし、法廷ドラマの設定が視聴者にいかにも法廷らしく受容されている理由は、それが事実そのままを再現しているかどうかという点にではなく、談話場面として公的制度的な制約的コミュニケーションの特徴が再現されている点にあると考えられる。

ここでも三つの要素を取り出すことができる。第一は、枠囲いの部分の「東京地裁・大法廷」のような社会的空間に関わる要素、「証言台」「弁護人席」「検察官席」「傍聴席」のような役割に応じた空間の配置、開廷という時間などの時空要素である。「地裁」「法廷」は、その社会で司法の役割上、極めて限定された場所であり、「限定」という条件が社会での特別な位置を示している。また、その内部は、役割に応じた空間で厳格に仕切られ、この「区画」という条件がやはりその社会での特別な位置を示している。「開廷」などの名詞は、特別な行為を示している。これらは社会的権威を産み出す空間的装置であり、非日常的で抽象的な性格を持っている。ドラマには、会議、査問、取り調べ、尋問、審議等々日常の時空間と異なる特別な時空要素が象徴的に描かれることが多く、それらはいずれも限定され仕切られた空間で遂行される特殊な行為という形で人間のコミュニケーションでの特異性を提示している。これは、法廷ドラマが文化を越えて広く制作されている点から分かるように、様式面での差はあっても文化を越えて見られる特徴と言え、日本語学習者の場合も、こうした特別な時空要素に関する知識が必要になる。第二は、下線部分の関与者、波線部分の会話の参与者の社会的属性・立場を示す主体要素で、法廷のような特別な空間では、特に役目に応じて発話しなければならず、日常場面よりさらに強く役割が談話を規定し、談話を構成する条件になっている。この場面では、裁判長が出席者の最後に入廷して、皆が起立した後、開廷を宣言し、被告人を呼びだして、本人確認を行うという一連の順序づけられた「開廷」

[24] 小川義龍（2015）「僕が裁判ドラマを見ない理由」『弁護士小川義龍の言いたい放題』http://ogawalaw.hatenablog.com/entry/2015/03/25/161357

airiti

の談話が行われることになる。ここからは、公的場面では役割による談話行動が非常に強く要求されることが分かる。日本語学習者の場合も、こうした日本の公的社会的立場、職業、業務に関する知識が仕事をしていく場合には必要になる。当然、実際の社会慣習に従った言語非言語行動やマナーに関する知識も必要になる。第三は、目的要素で、太線部のように「審理」する場面では、シナリオのように裁判官の友永が一定の順番で質問し、被告人の天地が、それに順番に回答していく形式で談話が進行する。公的制度的な制約的性格が強ければ強いほど、こうした規則性が談話展開を規定すると考えられる。当然、こうした場面ではそれぞれの明確な立場と目的があり、それに応じて規則に従った談話遂行が求められる。また、目的を達成するための非言語行動（厳粛な動き、表情、口調等）も必要になる。裁判を体験する例は常にあるわけではないが、公的制度的制約的な談話はビジネスの場面等でも、会議、プレゼンテーション、交渉、発表会などこれと同じような特徴を持っており、日本語学習者の場合も、それぞれの立場と役割を理解して、言語と非言語行動を実施しなくてはならない。

４．終わりに

以上のように、談話の「基本量」としての言語形式的単位ばかりではなく、「質的統一体」としての基本的単位として、場面、役割、目的を想定し、談話においてその具体的表徴として時空要素、主体要素、目的要素を理解することは、自然談話資料やアンケート、インタビューなどの資料の研究、理解と同様に、架空のドラマや漫画、小説などの中にも潜在的に存在している非常に多様な談話の場面、ストラテジー、規則等の特徴を理解して、その談話に参与する条件を考察する上で、大きな意味があると考えられる。大切なことは談話は、ただ言語表現を機械的に発話すればよいわけではなく、参与者としてその談話の場面、役割、目的を理解し、必要な言語非言語表現を運用できて初めて社会的に意味のある表現行動になるという

airiti

点である。同時に、談話は場面、役割、目的という複雑な条件を同時進行で理解し表現していくため、行為の失敗や不成功などの結果も自然に惹起されることを了解した上で遂行されるべき表現行動である。また、参与者が相互にこうした談話の場面、役割、目的を理解して運用する中で実現する相互行為であり、言語表現以前にこうした前提条件の共有がその談話の展開を規定しているのである。これはまた、その社会の構成員やその言語の習得者が程度の差はあっても身につけている社会文化的表現習慣でもあり、外国語学習の側面では異文化理解コミュニケーションの具体的理解表現内容として、その都度意識化していく必要がある、人間社会の表現文化の重要な内実とも言える。今回の論は試案に過ぎないものではあるが、より社会的意義のある言語研究のために、談話研究で新しい表現単位を設定することで今まで顕在化していなかった談話行動を構成する様々な要素を対象化することができ、それによって新しい研究分野、教育分野を産み出すことで、日本語学および日本語教育の質を変えることもできよう。今後も談話に関し、基本的単位に関する考察を続けていきたい。

註記
本論文は科技部専題研究計画103-2410-H-032-047-MY2の研究成果である。

テキスト
前川洋一「大麦畑でつかまえて」日本脚本家連盟（2007)『テレビドラマ代表作選集二〇〇七年版』日本脚本家連盟
井上由美子「マチベン　ファイルNo.1／No.4」日本脚本家連盟（2007)『テレビドラマ代表作選集二〇〇七年版』日本脚本家連盟

参考文献
荒川歩（2011)「指さし行動と発話による談話の達成(<特集>相互作用のマルチモーダル分析)」『社会言語科学』14-1
石黒圭・佐久間まゆみ・渡辺文生[他]・宮田公治・宮澤太聡（2014)「講義の談話の単位と展開(日本語学会2013年度秋季大会ワークショップ発表要旨)」『日本語の研究』10-2
市川孝（1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
小川義龍（2015)「僕が裁判ドラマを見ない理由」『弁護士小川義龍の言いたい放題』http://ogawalaw.hatenablog.com/entry/2015/03/25/161357
蔭山峰子・藤井みゆき（2009)「ビジターセッションにおける接触場面の談話・会話分析」『同志社大学日本語・日本文化研究』7
串田秀也(2005)「会話における参加の組織化の研究：日本語会話における「話し手」と「共ー成員性」の産出手続き」(京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文、2005年11月)

airiti

Goodwin, Charles (2000) Action and embodiment within situated humaninteract. Journal of Pragmatics32
黄馨儀 (2008)「テレビにおける女性イメージの一考察—NHK朝の連続テレビ小説から見た日本の女性像」『メディア学』23
佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 (1997)『文章・談話のしくみ』おうふう
Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-takingfor conversation. Language 50: 696-735. H. サックス／E. A. シェグロフ ／G. ジェファソン／西阪 仰訳／S. サフト翻訳協力 (2010)『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織 (世界思想ゼミナール)』世界思想社
ポリー・ザトラウスキー (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察 (日本語研究叢書 (5))』くろしお出版
施信余(2005)「依頼に対する「断り」の言語行動について ： 日本人と台湾人の大学生の比較」『早稲田大学日本語教育研究』6
高崎みどり・立川和美編 (2008)『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房
高崎みどり・立川和美編 (2010)『ガイドブック文章・談話』ひつじ書房
武田加奈子 (2007)「発話行為談話の調査・分析方法—勧誘談話を例に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』第174集「接触場面と言語管理の学際的研究 接触場面の言語管理研究vol.5」村岡英裕編
田中章浩(2012)「顔と声による情動の多感覚コミュニケーション」『認知科学』Vol.18No.3
田中惇(2014)「学習者の発話を促す試み-会話支援ストラテジーを活用して-」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』5
寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 (1990)『ケーススタディー日本語の文章・談話』おうふう
伝康晴・田中ゆかり編 (2006)『講座社会言語科学6方法』ひつじ書房
時枝誠記 (1988/1950)『日本文法 口語篇』岩波全書
中井精一編 (2005)『社会言語学の調査と研究の技法—フィールドワークとデータ整理の基本』おうふう
永野賢 (1986)『文章論総説』朝倉書店
表現学会 (1986-1999)『表現学体系』教育出版センター
表現学会 (2013)『言語表現学叢書』清文堂出版
平静・松村瑞子 (2011)「日中会話におけるポライトネス・ストラテジー」『Studies in Languages and Cultures』26
細馬宏通(2011)「漫才、コントにおけるツッコミ役のパフォーマティヴな気づき(「コミュニケーションと気づき」及び一般)」『電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎』111-190
細馬宏通・片岡邦好・村井潤一郎・岡田みさを(2011)「特集「相互作用のマルチモーダル分析」『社会言語科学』14-1P1-4
McNeill, David (1987) Psycholinguistics ：A new approach. NewYork：Harper & Row
McNeill, David (1992) Hand and mind . Chicago：University of Chicago Press
水川喜文 (2010)「会話分析による談話単位の革新とその課題」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』47P53-65
南不二男 (1972)「日常会話の構造—とくにその単位について」『言語』1-2号P108-115
泉子・K・メイナード (2001)『恋するふたりの「感情ことば」—ドラマ表現の分析と日本語論』くろしお出版
Morris, Desmond (1977) Manwatching：A fiegd guide to humanbehabior, NewYork：H.N.Abrams
柳田直美(2002)「日本語母語話者の会話支援ストラテジー ： 非母語話者との接触経験が及ぼす影響」『日本語教育方法研究会誌』9-1
吉野文・西住奏子 (2015)「「二言語併用ゼミ」の場面における参加者の言語使用-座談の分析に関する一試論-」『国際教育』8

airiti

References

Arakawa,A.（2011）Yubisashi koudou to hatsuwa niyoru danwano tassei. *Syakaigengokagaku*,No.14-1

Ishiguro.K.&Sakuma,M.& others.（2014）Kogi no danwa no tani to tenkai. *Nihongo no kenkyu*,No.10-2

Goodwin, Charles（2000 ）Action and embodiment within situated humaninteract. Journal of Pragmatics32

Hei,S.& Matsumura,Y.（2011）Nicchukaiwa niokeru poraitonesu sutoratejii. *Studies in Languages and Cultures*,No.26

Hosoma,H.(2011)Manzai,konto niokeru tsukkomiyaku no pafoomatibuna kizuki.*Denshijohotsuushingijyutsu kenkyuhokoku: HCS, hyumankomyunikeshonkiso*, No.111-190

Hosoma,H.& others(2011）Tokushu sogosayou no maruchimoodarubunseki. *Shakaigengokagaku*,No.14-1

Kageyama,M.& Fujii,M.（2009）Bijitaa sessyon niokeru sessyokubamen no danwakaiwabunseki. *Doshisyadaigaku nihogo nihonbunkakenkyu*,No.7

Kishida,H.(2005)Kaiwa niokeru sanka no soshikika no kenkyu: Nihongokaiwa niokeru “Hanashite” to “Kyoseiinsei” no sansyutsu tetsuzuki. *Kyotodaigakudaigakuin ningenkankyogakukenkyuka hakaseronbun*.

Kou,K.（2008）Terebi niokeru joseiimeeji no ichikousatsu: NHKasanorenzokuterebishosetsu karamita nihon no jyoseizou. Mediagaku,No.23

McNeill, David（1987）*Psycholinguistics ：A new approach*. NewYork：Harper & Row.

McNeill, David（1992）*Hand and mind* . Chicago：University of Chicago Press.

Mizukawa,Y.（2010）Kaiwabunseki niyoru danwatani no kakushin to sonokadai. Jokuseigakuen shakaifukushigakubu hokuseironshu,No.47

Minami,F.（1972）*Nichijokaiwa no kozo:Tokuni sono tani nituite*. Gengo,No.1-2.

Maynard,K.S.（2001）Koisuru futari no “kanjokotoba”: Doramahyogen no bunseki to nihongoron. Kuroshio shuppan.

Morris, Desmond（1977）*Manwatching：A fiegd guide to humanbehabior*, NewYork：H.N.Abrams

Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-takingfor conversation. *Language* No.50

Shi,S.(2005)Irai nitaisuru “Kotowari”no gengokodo nituite: Nihonjin to taiwanjin no daigakusei no hikaku. *Wasedadaigaku nihongokyoikukenkyu*, No.6

Takeda,K.（2007）Hatsuwakouidanwa no cyosabunsekihouhou: Kanyudanwa wo reini. Eds.Muraoka,H. *Chibadaigakudaigakuin jinbunsyakaikagakukenkyuka kenkyupurojekuto*,No.174.

Tanaka,A.(2012)Kao to koe niyoru Jyodo no takankaku komyunikeeshon. *Ninchikagaku*,Vol.18No.3

Tnaka,J.(2014)Gakushusha no hatsuwa wo unagasu kokoromi: Kaiwashien sutoratejii wo katsuyoushite. *Kokusaikyoyodaigaku senmonshikudaigakuin gurobarukomyunikeishonjissen kenkyuka nihongokyoikujissenryouiki jissyuhoukokushu*, No.5

Yanagida,N.(2002)Nihongobogowasha no kaiwashien sutorateji: Hibogowasha tono sesshokukeiken ga oyobosu eikyo. Nihongokyoikuhouhoukenkyukaishi,No.9-1

Yoshino,A.&Nishizumi,Y.（2015）”Nigengoheiyouzemi” no bamenniokeru sankashano gengoshiyo: Zadan no bunsekinikansuruichishiron. Kokusaikyoiku,No.8

※2015 年 3 月 27 日原稿受理、4 月 18 日審査通過